

## ピアノのお話 VIII

前にも述べたように、ピアノという楽器は“ピアノ（弱音）もフォルテ（強音）も出すことのできるチェンバロ”として18世紀の初めにイタリアで開発された楽器ですが、各地のチェンバロ作りの匠たちはこの楽器の持つ可能性に目をつけ、ピアノのピアノたる所以のメカニズムの“エスケープメント”（ハンマーが飛び上がって弦を打ち、そのあと急速に元の位置に戻る仕掛）の研究に取り組み、50年以上の歳月をかけて、ようやくこのメカニズムが実用化の域に達することになりました。モーツァルトが20歳の頃です。これ以後のモーツァルトの鍵盤楽器のための曲はこの新楽器である“ピアノ”のために書かれ、それ以前の曲はチェンバロ系の楽器のために書かれました。モーツァルトは、どういうわけか、この“ピアノ”と“チェンバロ”を区別せずに、どちらもドイツ語のKlavier（クラヴィーア）という名前と呼んでいます。いまの厳密主義の音楽史の講義に馴れた方は、ずいぶん無責任な呼び方をするなとお考えでしょうが、モーツァルトにとっては、どちらも“クラヴィーア”なのです。ついでにバッハにとっては“クラヴィーア”はすべてチェンバロのことです。だから“平均律クラヴィーア”と言えば、平均律に調律されたチェンバロということ。平均律というのは、自然界には存在しない一種の人工的な調律法で、自然界に存在する本来の音階である“純正調”の代わりに人工的に音階を12個の半音に均等に分けたやや無責任な音階ですが、1個の鍵盤楽器でいろんな調性の音楽を弾くのに便利なのです——曲の調性が変われば、本来なら、いちいち調律をし直さなければならないのですが、ピアノという高度なメカニズムを持つ楽器は素人が簡単に、即座に、調律し直すというわけにはいきません。専門の調律師を必要とします——チェンバロはその点便利で、ギターやヴァイオリンのように音楽家が自分で調弦できたのです。平均律は“ピアノ”のようなガンコな楽器ができたおかげで急に需要が高まりました。

ピアノ作りの職人たちは、メカニズムの改良に取り組んでいくうちに、この新しい楽器にまだまだ新しい別な可能性のあることを発見しました。音量と音域の拡大です。もっと材料を研究すれば、もっと大きな音を出すことができ、もっと高い音や低い音を出すことができる——凄い発見です。ピアノの実用化はモーツァルトの20歳の頃と言いましたが、それから50年経ってショパン、シューマン、リストらが20歳になる1830年頃までに、ピアノは高々度成長を遂げて、ほぼ現在のピアノと同じような広い音域と大きな音量を誇る楽器にと変身してまいります。

18世紀から19世紀へ、それは王侯貴族たちの支配する社会から一般民衆が主導権を持つ社会への転換でした。19世紀の初めには馬車と帆船でしたが、この世紀のうちに鉄道が通り汽船が走り、自動車が馬車にとって代わろうとします。18世紀には無かった“都市労働者”という新しいクラスの人々が街に溢れます。大量生産・大量流通という時代になります。この人たちを収容する劇場やミュージック・ホールが作られます。一つの劇場の収容人員も1000人規模になります（モーツァルトの音楽界は満員でも200人くらいでした）。すべてが大きくなります。オーケストラも18世紀の宮廷オーケストラはせいぜい30人でしたが、19世紀になると50人、60人と大型になります（ベルリオーズは1830年に500人のオーケストラを夢見ましたが、19世紀の終わりのマーラーは800人の合唱とオーケストラを実現しました。この世紀は“拡大”の世紀でした。この世紀の初めの頃は、ピアノはせいぜい70鍵でしたが、まもなく88鍵の現代のコンサート・ピアノのサイズになります。

この大型でメカニズムの進歩した“19世紀のピアノ”は、ただ大きな音をもって民衆のニーズに答えただけでなく、両手が88鍵の鍵盤の上を疾風のように荒れ狂うかと思うと、月の光の静寂と叙情を描くことができるという、幅の広い演奏を可能にして、音楽の可能性を無限大に広げて見せることになりました。ピアノは一躍楽器の王者の成功を贈られ、数多くの名人演奏家が妍を競うようになります。

その名人ピアニストの時代の幕を開けたのは

フェリックス・メンデルスゾーン（1809-1847）

クララ・シューマン（1819-1896）

フレデリク・ショパン (1810-1849)  
フランツ・リスト (1811-1886)  
ジグスメント・タールベルク (1812-1871)

といった人たちです。

この人たちの功労は何と言ってもピアノを縦横に操って、それまでとまるっきり異なった音の世界を創り出して見せたことです。

これらのピアノ演奏の名人に作曲家のローベルト・シューマンを加えれば、ピアノ音楽の花盛りの時代を創出した役者が揃います。

(つづく)



執筆/石井宏 (音楽評論家)

1930年、東京生まれ。音楽評論家・作家・翻訳家。モーツァルト評論の第一人者と目され、評論活動のほか、ラジオやテレビの番組でも評判となる。2004年、『反音楽史 さらば、ベートーヴェン』(新潮社)で山本七平賞を受賞。

珠玉の名曲と画像で辿るピアノの詩人の生涯

## 仲道郁代 ショパン鍵盤のミステリー

第1回「天才誕生～青年期」

2019.4/13(土) 14:00 開演 [13:30 開場]

チケット  
全席指定 ⑤ 4,000円 ④ 2,000円  
[サラマンカメイト ⑤ 3,600円 ④ 1,800円]  
※学生半額 (30歳まで)

[オール・ショパン・プログラム]

ポロネーズ 第11番 短調

ノクターン 第20番 嬰ハ短調 (遺作) 「レント・コン・グラン・エスプレッシオーネ」

12のエチュード 作品10より「別れの曲」「革命」

華麗なる大ワルツ 変ホ長調 作品18、バラード 第1番 短調 作品23 ほか

※曲目は変更になる場合がございます。



チケット  
発売中

仲道郁代のスーパーピアノレッスン

公開レッスン 2019.4.13(土) 16:30~18:30

聴講料 無料

聴講は『仲道郁代 ショパン鍵盤のミステリー』の  
公演チケットをご購入いただいたお客様に限ります。

©Kiyotaka Saito

ピアノでみんながひとつになる。美味しく！楽しく！1日中ピアノに浸る音楽フェス！！

## ジャコバン国際ピアノ音楽祭 2019 in 岐阜

チケット  
発売中

2019.5/19(日)

ソフレ・コンサート

開場 16:20 開演 16:40

[料金] 全席指定 2,000円 [サラマンカメイト 1,800円]

マチネ・コンサート

開場 13:00 開演 13:30

[料金] 全席指定 1,500円 [サラマンカメイト 1,350円]

I. 13:30 ~ 14:30 パリのピアノスケッチ

[出演] 三浦友理枝

[曲目] ドビュッシー：亜麻色の髪の乙女、月の光 ほか



©Yuji Hori

II. 15:00 ~ 16:00 ジャズ de シャンソン

[出演] フィリップ・レオジェ

[曲目] ルイギ：バラ色の人生、ベティ：セ・シ・ボン

ブルレ：行かないで ほか



I. 16:40 ~ 17:40

[出演] セリア・オネット・ベンザイード

[曲目] 未定



©Natasha Colmez-Galard

II. 18:40 ~ 19:40 2台ピアノで聴くシンフォニー

[出演] 近藤嘉宏、高橋多佳子

[曲目]

ブラームス：交響曲 第4番 短調 Op.98

(2台ピアノ版) ほか



©Akira Muto